

親子間のコミュニケーションが高校生の進路選択へ及ぼす影響

The effect of communication between parents and children on course selection of high school students

桃崎 沙耶

Saya Momosaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：進路選択，親子関係，青年期

Key words : Course selection, Parent-child relationship, Adolescence

1. 研究目的

エリクソンの漸成発達理論によれば，青年期の主題は「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」である。具体的に大野（2014）は，このアイデンティティの統合のために，将来の自分の人生を選ぶこと，将来のキャリアのためのスタートラインに立つ覚悟を決めることが，青年期の主な課題であると述べている。

この「将来の自分の人生を選ぶ場面」として多くの現代青年が対峙しなければならないのが高校卒業後の進路選択である。高校卒業後の進路選択は，進学か就職かをはじめとして選択肢が増えるし，進学の場合には将来の職業選択にも影響する。このため進路をどうするかという問題は，青年にとって人生最初の大きな選択といえよう。実際に，ベネッセ教育総合研究所（2015）が行った高校生活と進路に関する調査では，3月時の高校3年生を対象に，進路選択で悩んだ経験についてたずねた。その結果，進学先（「4年制大学」「専門学校・各種学校」「就職」「大学等の進学準備」）にかかわらず，半数以上の生徒が，「自分の就きたい職業が分からない」「自分の適性（向き・不向き）が分からない」という悩みを経験していた。このことから，高校卒業後の進路選択は高校生が悩む問題の1つであることがわかる。

近年，進路選択に対して抱える悩みは高校生本人だけでなく，保護者も共有するものとなっている。全国高等学校PTA連合会による高校生と保護者の進路に関する意識調査結果報告

（2018）では，「保護者は進路選択の悩みや不安を知っているか」との質問に対して高校生の19%が「よく知っている」，47%が「少し知っている」と回答している。2005年に行われた同調査

では，同様の質問に対し高校生の14%が「よく知っている」，35%が「少し知っている」と回答しており，保護者が自身の進路選択の悩みや不安を知っていると感じる割合は，過去の調査と比較すると増加傾向にあることが示されている。また，対象となる高校生の79%が進路についての話を保護者としていると回答し，63%は保護者にアドバイスを求めることも明らかになっている。進路選択について相談する相手では，「母親」が82%，「父親」も42%で回答されている。このように進路選択についての相談相手として「母親」が子どもにとって大きな存在であることが示されている。両親は高校生にとって，進路選択に対する不安や悩みを共有するだけでなく，相談してアドバイスを求める存在となっている。

また，2018年に行われた同調査では，進路選択について影響を受ける人物として，「母親」が42%，「父親」が29%で回答されている。ベネッセ教育総合研究所（2015）による高校生活と進路に関する調査では，「4月からの進路を決める際に，次の人の意見やアドバイスはどれくらい影響しましたか。」という質問に対し，「4年制大学に進学」の群のうち72.6%，「専門学校・各種学校に進学」の群のうち71.4%，「就職」の群のうち65.1%，「大学等の進学準備」の群のうち69.4%が「母親」を「とても影響した」または「まあ影響した」と選択している。「父親」を「とても影響した」または「まあ影響した」と選択した割合も，「4年制大学に進学」の群のうち49.7%，「専門学校・各種学校に進学」の群のうち41.1%，「就職」の群のうち48.8%，「大学等の進学準備」の群のうち63.9%であった。また荻上（1984）の大学進学志望動機に関する研究によれ

ば、“親孝行のため”、“親が勧めるから”などの項目からなる「家族への配慮と規範機能」という進学動機が見い出されている。また、この進学志望動機に際して影響を受けた人を示す、人的影響源に関する分析では、父親、教師、母親、友人の順で他の影響源に比べ出現頻度が高いことが明らかにされている。このように高校生にとって両親は、単なる相談相手だけでなく最終的な進学志望先の決断に影響を及ぼしていることがわかる。

青年期は、それまでの親子関係が変容し、心理的離乳が起こる時期であるとされる。落合・佐藤(1996)によれば、高校生から大学生にかけての親子関係は、「親が子を危険から守る」「親が子と手を切る」「親が子を抱え込む」という関係から、「子が親から信頼・承認されている」「親が子を頼りにする」関係に変化するという。このように青年期の中でも高校生から大学生への成長は、親子関係に大きな変化をもたらすことが明らかにされている。高校時代までは親は子どもとの心理的距離が、親が子どもを保護し援助するために近い、または親が子どもを放任するために遠いという状態であった。それに対して、大学時代は子どもを信頼することで一定の距離感を保つ相互的な関係になると考えられる。田中・上村(2017)の研究によれば、青年期における親子の心理的距離は、青年期を通して段々と小さくなっていくパターンが多数派である。その心理的距離の変化は子どもの将来志向性や自尊・他尊性の発達と関連があることが示されている。このパターンは、調査において約4割であったことから、青年期の自我発達と親子の心理的距離が関連している可能性が示されたといえる。これらの研究から、高校卒業後の進路選択時には、親子関係の変容が起きていることが示唆される。

進路選択場面は、子どもが自身の意志を親に伝える機会である。将来に大きく関わる決断であるため、平常時のコミュニケーションとは異なるコミュニケーションが親子間で行われることが推察される。高橋(2008;2009)は進路選択時の親子間コミュニケーションの特徴を測定する尺度を作成し、調査を行っている。その結果、青年期の子どもが認知した両親から子どもへのコミュニケーションの特徴は、男女とも自分の意見を伝えてきたなどの「独自性」、最終的に決めた進路を応援してくれたなどの「結合性」、相談しても肯定するだけであったなどの「議論の抑制」の3因子構

造が確認されている。また、子どもから母親と父親それぞれに認識しているコミュニケーションの特徴は、両親と進路について話し合うのを避けていたなど「議論の回避」、反対した場合に説得したなどの「議論による立場の明確化」、期待に沿うように進路を決めたなどの「結合性」、相談せずにはほぼ自分で決めたなどの「自律した意思決定」の4因子構造が確認されている。進路選択時の親子間コミュニケーションは子どもの性別に関わらず、同様のコミュニケーションがなされている。両親から子どもへ対するコミュニケーションの特徴は同じにもかかわらず、子どもから親へのコミュニケーションの特徴は異なっており、両親からの影響を受けて決断することもあれば、両親からの影響を避けようとすることもある。つまり、意思決定において両親の影響を受けることを子どもが理解しており、だからこそ子ども側が選択するコミュニケーションスタイルが異なると推測される。

進路選択場面では、親子間の意見の不一致が起きる場合がある。ベネッセ教育総合研究所による高等学校の進路指導に関する意識調査-全国高等学校進路ご担当先生対象アンケート調査(2004)では、進路指導の上で困っている点として、「親子間の意見の不一致」や「保護者の意識の格差が大きい」等、保護者の理解や協力についての回答は1割以上見られたことが示されている。このような進路選択における親子間の意見の不一致は、親子間の葛藤を引き起こす原因となるだろう。深田・山根(2003)によれば、大学生の対人葛藤解決方略の使用可能性は父親、母親、同性の親友の中で、父親の場合が最も高く、母親はその次であった。使用された解決方略は、従うといった「同調方略」が父親に、相手を説得するといった「協調方略」が母親に最も使用されることが明らかとなった。従って、子どもは葛藤が起きた場合、父親には従い、母親には交渉する可能性が高いことが示された。つまり、親子間で意見の不一致が起きた場合に、子どもは相手によって自分の意見を主張するかを変えていることが分かる。しかし、この研究は大学生の日常場면을対象としたものである。従って、高校生が対象となり、また両親に自身の意志を示すことが必要な進路選択場面では、異なる対人葛藤解決方略が使用されることが推察される。

以上から、高校卒業後の進路選択は高校生にと

って将来に影響する大きな決断であり、親子で共有される問題の1つであるといえる。子どもの決断には親の意見も影響を及ぼすことが明らかにされ、少なからず意見の不一致が起きる可能性も示唆される。しかし、これまでの研究では子どもの進路選択場面において親が影響することは示されているが、具体的にどのような影響を及ぼしているのかを検証している研究は見られていない。また、進路選択において親子間で意見の不一致という葛藤が生じることも示されているが、その葛藤をどのように解決したのかについて調査した研究も見られない。

そこで本研究では、青年期の子どもの進路選択場面での意思決定に保護者がどのように影響を及ぼしているのか、平常時の親子関係と進路選択場面における親子関係ではどのような変化が起きているのかについて明らかにすることを目的とし、大学選択の進路選択場面での親子間のコミュニケーションと平常時の親子間のコミュニケーションを比較する。更に、最終的な進路選択結果への親の影響の有無を明らかにし、進路選択時に親子間で葛藤が発生した場合どのような解決方略が用いられるのかについても検討を行う。

2. 研究実施内容

調査対象者：大学生及び大学院生

調査方法：質問紙調査を行う。

調査項目

1. 大学進学時の進路決定プロセスに関する項目 (本多・落合, 2006)
2. 対人葛藤方略スタイル (加藤, 2003) の文章中の「友人」を「両親」に変更しての使用を検討している。
3. 進路選択時の親子間コミュニケーション尺度 (高橋, 2009)
4. 親への愛着尺度 (丹波, 2005) または親子関係の親密さ尺度 (山崎・杉村・竹尾, 2002) の使用を検討している。

3. 引用文献

- [1] ベネッセ教育総合研究所(2004). 高等学校の進路指導に関する意識調査-全国高等学校進路

ご担当先生対象アンケート調査. Retrieved from

<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3323> (2019年2月16日).

- [2] ベネッセ教育総合研究所(2015). 高校生活と進路に関する調査. Retrieved from <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4766> (2019年2月16日).
- [3] 深田博己・山根弘敬(2003). 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究 広島大学心理学研究,3,31-49.
- [4] 瀧上克義(1984). 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究,32(1),59-63.
- [5] 大野久(2010). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房
- [6] 落合良行・佐藤有耕(1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究,44,11-22.
- [7] 高橋彩(2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究,16(2),159-170.
- [8] 高橋彩(2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究,17(2),208-219.
- [9] 田中敏・上村桃香(2017). 青年期全体における親子間の心理的距離の変化と青年の自我発達との関連性 信州心理臨床紀要,16,59-71.
- [10] 全国高等学校 PTA 連合会(2018). 高校生と保護者の進路に関する意識調査結果報告. Retrieved from http://www.zenkoupren.org/pdf/siryobox/chosakenkyu/shinroishiki_haifu20180201.pdf (2019年2月17日).

4. 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成30年度大学院生研究助成(B)(DB3030)「映像視聴によるストレスマネジメント効果の検証」より研究助成を受け行ったものである。